5. 水	40%	7. 流動パラフィン	14.5%
6. 香 料	0.5〃		

4を 40° に温め，これに5を 40～50° に加温したものを，よくかきまぜながら加えて，乳化させる．これに 1，2，3，7の混合熔融したものを，よくかきまぜながら加え，充分に乳化させた後，かきまぜながら冷却する．

(5) グリセリンモノステアレート	5%	流動パラフィン	54%
ワセリン	17〃	水	10.5〃
ロート油	10〃	香 料	0.5〃
脱水ラノリン	3〃		

水，香料以外のものを混合熔融させ，これに水を同温に加熱したものをかきまぜながら注加する．かきまぜながら冷却し，この間に香料を加える．

第5章 化 粧 水

皮膚の手当科としての化粧水の歴史は，古いものであるだけに，現在の化粧水の種類は極めて多い．従ってその分類も人によって違うが，次ぎの様に分類することが適当であると思われる．

1. 澄明な化粧水
   a) アルカリ性のもの　b) 酸性で収レン性のもの　c) 植物汁液性のもの
2. 乳 液

I. アルカリ性の化粧水

普通の化粧水として．化粧下用，荒止め用として用いられる．

これは 水，アルコール，グリセリンを主成分として，少量のアルカリを配合し，香料と着色料を添加したものである．

グリセリン は体温では蒸発し難いので，皮膚表面に乾かない潤いを与え，角質層を澄明に柔かにし，皮膚の乾燥や荒れを防ぐ効がある． dry skin は角質層の保水性の欠乏によることが明らかにされ，近年この種の保湿剤の化粧効果が再認識されて来た．グリセリンは角質層に浸透する程度で，それより内部へ吸収されることは少い．グリセリンは吸湿性が強いので，濃厚なものを皮膚に塗れば，表皮の水分を吸収して炎症を起す恐れがある．荒れた皮膚には 30～40% の濃度までは用いてもよいが，それ以上の濃度のものは，化粧用としては刺戟が強くて，かえって有害である．化粧水には 10% 位までで，4～5%のものが多い．

グリセリンの代りとしてはプロピレングリコールが用いられる．またソルビトールもよく用いられる．エチレングリコールは有毒であるから用いてはならない．

アルコール は適当に水でうすめて皮膚に塗れば，その蒸発による清涼感と，軽い収レン作用により皮膚をひきしめる効果がある．濃いアルコールは